

原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ
「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第1回外部評価委員会
逐語録

(木村) それでは、平成25年度の第1回外部評価委員会を始めたいと思います。

まずは資料の確認です。一番上に議事次第があります。1-0と番号を振っていただければと思います。次は、今年度の業務計画書です(1-1)。その下に、今年度のメンバー表があります(1-2)。次に、パワーポイント資料がありますが、こちらが今日のメインの説明資料になると思います。1-3でお願いします。次に、A3が2つ折りになっていて、その中に資料が4種類挟まっているものがあります。これをまとめて1-4でお願いします。こちらがシンポジウムで配布された資料になります。

その後の資料は、参考までにお付けしています。来週、プログラムオフィサー(PO)の岩田先生の視察があり、そちらで用いる資料です。中間フォローの研究管理表が1-5、経費使用状況調査表が1-6です。

また、今までに我々が開いてきた会合の議事録もお配りしています。第1回業務推進全体会合、第2回業務推進全体会合、第1回フォーラム研究会から第6回フォーラム研究会ということで、1-7-1から1-7-8と番号を振ってください。

以上が本日用意した資料になりますが、過不足等はございませんか？ よろしいでしょうか。

それでは、議事に従って進めてまいります。平成25年度のプロジェクトが5月21日から始まって、約半年が経過しましたが、その中で、どこまで進んだのかということを中心にお話ししていきたいと思います。

1. 平成25年度業務の概要について

(木村) まずは「平成25年度業務の概要について」です。資料1-1をご覧ください。こちらは、文部科学省と契約した書類の一部になります。

「3. 委託業務の目的」から読み上げていきます。

市民と専門家に対する社会調査をベースとしたコミュニケーション・フィールド(「フォーラム」と呼ぶ)を構築し、参加者への意識調査から、フォーラム参加によるダイナミックな意識・態度・信頼の変容を明らかにするとともに、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの枠組みおよび要件を見出すことを目的とする。

以上が3年間の目的になります。

2年目にあたる今年度は、4番に書かれている業務を行うこととなります。

(1) フォーラムの試行。

①フォーラムの準備・実施・記録。2012年度に作成した運用マニュアルを活用して、2013年上期に複数回のフォーラムを実施する。フォーラムで話し合われたことは記録し、ホームページで公開する。

②一般公開シンポジウムの準備・実施・記録。全フォーラム終了後、フォーラムに関する一般公開のシンポジウムを実施する。シンポジウムの様子は記録し、ホームページで公開する。

(2) フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定。こちらは再委託先の日本原子力学会が実施する業務で、土田先生の担当部分になります。

各回のフォーラムにおいて、アンケート調査を実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を測定し、フォーラムの効果を定量的に明らかにする。

(3) フォーラムの再設計。

①インタビューとフォーラム記録による効果検証。全フォーラム終了後、参加者にインタビューを実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を定性的に明らかにする。フォーラム記録と併せて分析し、参加者に感じられたフォーラムの効果がいかなるダイナミズム（参加者同士の相互作用）と関係していたかを明らかにする。また、「原子カムラ」の境界を越えられたかどうかという観点から、フォーラムの効果検証を行う。

②フォーラムの改善案の整理と再設計。「原子カムラ」の境界を越えるためのポイントを整理し、現時点で明らかになったコミュニケーション・フィールドの枠組みおよび要件を整理する。同時に、(1)①で失敗した点についても整理し、改善提案を行う。これを踏まえて、フォーラムの目的、応募方法、フォーラム参加者選定方法、実施方法、ファシリテーション方法、一般公開シンポジウムについて、再設計を行う。

③フォーラム参加者選定。フォーラム参加者選定方法に則り、参加者を選定する。

(4) 社会調査の実施。こちらも再委託先の原子力学会の業務になります。

①調査項目の再設計。エネルギーや原子力に関する意識を測定する質問項目を再設計する。また、フォーラム参加者を決定するための市民および専門家への調査票および依頼書を、フォーラムの再設計に準じて作成する。

②市民および専門家への社会調査の実施。作成した調査票を用いて、市民の代表として首都圏住民（回収数 500 名規模）、および、専門家の代表として原子力学会員（回収数 500

名規模) に対して、アンケート調査を実施し、結果を分析する。また、公正のために、アンケート調査結果の概要はホームページで公開する。

③フォーラム参加者への意識測定項目の再設計。フォーラム参加者のダイナミックな意見・態度・信頼の変化を測定するための項目を見直す。

(5) 情報の共有および成果の取りまとめ。こちらは再委託先と合同で、全体で行なう業務です。

業務推進全体会合によって業務の方向性・進捗を確認し、成果を取りまとめる。また、学会等で情報収集および成果発表を行う。

(6) 外部評価。こちら合同で行っています。今日の会合はこの項目になります。

年度中期・最終の 2 回において外部評価委員会を開催し、業務の適切性、公正性、学術的新規性等を評価する。

以上が、業務計画として契約している内容です。

次のページには、契約時に考えたスケジュールが載っています。ここでは 4 月からとなっていますが、実際に動き始めたのは 5 月後半からでした。ただ、今のところ、それほど遅れることなく進捗しています。詳しくは、次の議題でお話しできると思います。

次に、資料 1-2 をご覧ください。こちらが本年度のメンバーになります。

私が、昨年度は東大所属でしたけれども、今年度からはパブリック・アウトリーチ所属で、研究代表者を務めています。研究員としては、神崎さん、諸葛さん、久保さん。そして竹中さん、丸山さんを NPO で研究員として雇用するという形を取っています。

原子力学会では、特別専門委員会を組織して、土田先生が主査、篠田さん、別府さんが委員として、研究に深く関わっているということになります。

社会調査に関しては、「社会調査グループ」に書かれている方々に協力していただいています。

また、フォーラム研究会グループとして、NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネットさんから、6 名の協力をいただいています。特に、前半はフォーラムの運営が中心だったため、獅子奮迅の活躍をしていただいたということになります。

研究補助者として、大石さん、円満字さんを NPO で雇っています。

最後に、業務評価委員として、皆様のお名前を載せています。本日は森田先生のご都合がつかないということでいらっしやいませんけれども、今日の議事録が出来上がったところで資料一式をお送りして、コメントをいただく予定です。

業務計画に関しては以上ですが、ご質問があれば、お受けしたいと思います。

(新澤) 文部科学省の、何のプログラムだったか、確認してもよろしいですか？

(土田) 原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブです。

(新澤) 文部科学省には研究開発局がありますよね。本流ではないところで、新しいことに取り組んでいる部局です。最近、関西電力などの電力系は予算がもらえていないのです。原子力文化振興財団などが中心にやっていたけれども、教育のほうに移ってしまったから、全然もらえていないのです。そういう動きがあると、いろいろなところに影響が出てきますね。

(木村) このプログラムは教育ではなく研究なので、しばらくは動けると思うのですが、それでも。

ただ、それに関して、少し脇道にそれますが、今年度からこのイニシアティブの枠組みは、原子力と社会の関係の研究を受け付けていないのです。次年度も受ける気はないようです。社会研究に関しては、少し引いているようです。

(新澤) そういう動きは注視していないといけませんね。

(木村) そうですね。部内の縦割りの話もあるし、研究のトレンドが、今は社会分野から離れているみたいです。また揺れ戻しは来るのでしょうか。

(新澤) 必要性を訴えたりしないと。

(木村) 環境省ではそういう分野が重要だと思える人たちが増えてきていると思うので、そちらも検討してみたいと思います。

でも、本当は文科省も、原子力をやるなら、そういうところにも取り組んでいかなければいけないと思うのですが。このプロジェクトでなるべくいい成果を出して、必要性をアピールしていきたいと思います。

すみません、脱線しました。では、計画については、この後の進捗報告の中でも触れていけるとしますので、議題を次に移したいと思います。

2. 進捗状況の報告

(木村) それでは、進捗状況の報告をいたします。1-3の資料をご覧ください。

(スライド2) まず、3年間の概要ですが、これは昨年度と変わっておりません。

業務全体の目的は、先ほど読み上げたものです。

その下に、実施内容の概要が書かれています。

1. 市民（首都圏住民 500 名規模）と専門家（原子力学会員 500 名規模）に対する社会調査を実施し、
2. これをベースとしたコミュニケーション・フィールド（原子力に対する賛否、安全性に関する考え方等を考慮して、原子力に対する考え方のバランスが取れるように、一般市民および専門家から 10 名程度ずつを選出して「フォーラム」とする）を構築し、
3. フォーラムを実施する。
4. フォーラム参加者への継続的な調査を実施し、市民はもちろん、専門家側の意見形成（意見変容）プロセスをも同時に見ることができ、コミュニケーションによる市民と専門家の相互作用をダイナミックに捉える。
5. これを 2 サイクル実施する。

ということになります。第 2 サイクルの 1・2 までが今年度の業務になります。

(スライド3) スライド3では、サイクルと年度進行を表にまとめました。

白い字の部分は、昨年度実施した内容です。太字になっている部分が、今年度実施する内容です。サイクル2以降の細字の部分が来年度実施予定の部分です。

黒の太字の部分が、終了しているもの。青の太字の部分が取り組み中のもの。赤の太字の部分がこれから始める部分です。おおよその目安をまとめています。

(スライド5) それでは、先ほどの業務計画書の内容に合わせて、進捗状況をご報告したいと思います。

まずは(1)フォーラムの試行、①フォーラムの準備・実施・記録ですけれども、達成率100%です。市民10名、専門家10名によるフォーラムを5回実施しました。5月25日から隔週の土曜日に開催し、時間帯は基本的には13時から16時半でした(初回は17時まで)。実は、専門家は、1名中途リタイアがありましたので、最終的には市民10名、専門家9名になりました。また、フォーラムの発言内容は逐語録にしています。チャタムハウスルールを準用し、誰が言っているかは分からないけれども、基本的には全ての発言を書くというルールの下で記録を作成し、ホームページで公開しています。

②一般公開シンポジウムの準備・実施・記録に関しても、達成率は100%です。2013年9月16日(月曜・祝日)の13時から16時半、実はフォーラムと同じ時間帯にしています。ですけれども、東京大学の武田ホールにてシンポジウムを実施しています。そして、シンポジウムの記録もホームページに掲載しています。

定松先生にはシンポジウムに来ていただきました。また、松田先生もご出席の予定でしたが、台風の影響でお越しいただけなかったと。ただ、記録を見ていただいたと。

(松田) はい。拝見しました。面白かったです。

(木村) シンポジウムの内容については、後半に紹介していきたいと思います。

(スライド6) では、次の項目です。(2) フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定。原子力学会に再委託している内容です。こちらに関しては、達成率 90%と表現させていただきました。フォーラムの前後、各回フォーラム終了時にアンケートを実施。現在分析中。分析の一部はシンポジウムにて発表済み。もうかなりの部分は分析が終わっているけれども、まだまとめてはいないという状況です。こちらについても、後ほど、土田先生から資料を使って説明していただこうと思います。

(スライド7) 次の項目です。(3) フォーラムの再設計、①インタビューとフォーラム記録による効果検証については、達成率 50%です。フォーラム参加者 20 名にインタビューを実施しました。1 名途中リタイアと言いましたけれども、その方にも、なぜリタイアなのかということも含めて、インタビューを実施しています。そして、現在は分析中、分析の一部はシンポジウムで発表済みということですが、まだこちらは十分な分析ができていないということで、50%と書かせていただきました。

②フォーラムの改善案の整理と再設計。こちらは、①を受けて再設計していきますので、今のところ達成率は 0%です。

③フォーラム参加者の選定は、(4) の社会調査が終わった後に実施する内容で、2014 年 2 月より実施予定ということになります。

(スライド8) 続いて、(4) 社会調査の実施。①調査項目の再設計は、現時点では達成率 0%です。まさに作業を開始したところになります。来週、業務推進全体会合が開かれるのですが、そのときにたたき台を出して議論する、というスケジュールで進めています。

従いまして、②社会調査の実施、③フォーラム参加者への意識測定項目の再設計も達成率 0%になります。社会調査は 2014 年 1 月に実施予定です。

(スライド9) 次の項目です。(5) 情報の共有および成果の取りまとめは、順調に行っているということで、達成率 50%と書かせていただきました。

今までに業務推進全体会合を 2 回実施しています。今後、11 月 8 日、12 月 20 日の 2 回で社会調査票を確定する予定です。また、年度の最後にまとめの会合を用意しています。

また、学会等での情報収集および成果発表に関しては、2013 年の日本原子力学会秋の大会が青森県の八戸工業大学で開催されましたけれども、ここで計 5 件の発表を実施して、様々な意見を伺ってまいりました。

3 件は、原子力学会の社会・環境部会と原子力学会の特別専門委員会の共催の講演会で、竹中さんから原子力カムラに関する調査について、土田先生からは社会調査について、最後に私からフォーラムという試みについて、それぞれ紹介させていただきました。

また、その他に、私と竹中さんとで 1 件ずつ発表をしています。コミュニケーション・マニュアルの意義や、フォーラムについて、学問的な話をしてまいりました。

特に、前者の 3 件のシリーズ発表のときは、150 人くらいの方に来ていただきました。そのときにシンポジウムの宣伝もして、シンポジウムも申し込み自体はそれなりにあったのですけれども、残念ながら当日は台風ということで、少し参加者の数は減ってしまったのですけれども。

以上が今までに行った成果発表になります。

今後ですが、2014 年 8 月に環太平洋原子力会議（PBNC）がカナダで開催されるということで、2 件ほど発表することを計画しています。

また、原子力学会誌のアトモスに、このプロジェクトの紹介記事を書いてくださいとお願いされていて、土田先生が社会調査に関して、私がフォーラムの取り組みを中心に、1 件ずつ記事を書くことを計画しています。掲載されるのは来年になると思います。

その他にも、もう少し成果がまとまってきたら、論文も提出していこうと考えています。見込みも含みましたけれども、以上が（5）に関する進捗です。

（6）外部評価に関しては、本日をもって達成率 50%ということになります。

ということで、先ほどの業務計画書に従って、進捗率をご紹介しました。学問的な成果については、この後、シンポジウムの資料を使ってご説明したいと思っておりますけれども、ここまでの進捗状況について、ご意見、ご質問などがありましたら、一度時間を取りたいと思います。いかがでしょうか？

（松田） 成果発表に関しては、遠慮なさらず、具体的に書いてもらいたいですね。予定でもいいと思います。

私もアトモスに一度投稿したことがあるのですが、かなり厳しい査読チェックを受けました。アトモスはいわゆる普通の業界誌というレベルではないですね。

（木村） そうですね。専門家が事実をしっかりと押さえて、その上で、一般の読者にも分かりやすく書きなさいということを要求している学会誌なので。私は、逆に、査読をしたことがあるので、その厳しさは知っています。

（松田） ええ。ですから、アトモスに載るということは、とても評価が高いということですよ。

（木村） 一般業界の方も読んでくれる冊子ですし、プロジェクトの宣伝にもいいと思い

ますので、しっかりと書こうと思っています。

(安部) お話を聞いていて、順調に計画通り進捗しているように思いましたので、問題は無いのではないかと思います。

本筋から外れた些細なことなのですが、フォーラムの記録は PONPO のホームページに掲載しているということなのですが、アクセス数はどのくらいなのですか？

(木村) アクセスカウンターは用意していないので分からないのですが、少なくとも、フォーラムに参加した人たちは見ている人が多いようです。そういう意味では、フォーラム参加者が記録が公開されているのを見て、公平性を感じる安心材料として役に立っているのではないかと思います。

ただ、どういう人がどこまで見ているかは、分かりません。

(安部) 成果を広く一般にも見てもらって、スクリーニングにかけるということは、今回のプロジェクトとはあまり関係がないこととお考えですか？

(木村) それをやると、かなり厳しいハードルになりそうだという予感もあったので、今回はタッチしていません。

(安部) それでアクセスカウンターもしていないと。

(木村) はい。逆に、そんなものをつけて変なことになったらいやだなと思ひまして。

(安部) 分かりました。それは理解できますので、それで結構です。

(松田) 私の感覚では、ホームページは、見る人の数ではなくて、どういう人が見ているか、のほうの方が大事ではないかと思います。

原子力以外のリスクコミュニケーションをやっている方たちが見ている原子力の世界と、原子力のリスクコミュニケーションをやっている方たちが見ている原子力の世界との間に、大きなギャップがあるような気がするのです。そういう中で、このホームページを、自分の研究に対するカウンターパートみたいな形で読まれる方が多いのではないかと。

私は NPO のお手伝いをしているのですが、例えば海外取材に行くと、限られた時間の中で取材をするので、どうしても聞きそびれてしまうことが多々出てきます。それを補完するために、インターネットで検索することがよくあるのですが、コピー&ペーストのような内容がとても多いのです。そういう中に、きらりと光るものもあるのですが、やはりそれは本気で勉強している方のものなのです。いろいろ調べていると、そういう宝物のよう

なページに行き当たるのですよ。私は、この研究のホームページもそうではないかと思っています。

(定松) 私もホームページを拝見しました。チャタムハウスルールで個人が分からないようにすることはとても大事なのですが、あの記録の方式だと、この人が次にどこで発言したのかが分からないのですよ。それを分かるようにするのも駄目なのですか？

(木村) いえ、それでもいいのですけれども、例えば木村さんはずっと A さんにしよう、土田さんはずっと B さんにしようという形で、全 5 回を通してしまうと、さすがにデータを出しすぎだろうということで、全部消したという経緯です。

(定松) ある 1 回の中で、番号などを振って、この人がまたここでこういうことを言っているんだな、みたいなことが辿れると、見やすいかなと思ったのです。ただずらっと並んでいるだけだったので、(話した) 順序が分かりにくいかなと。

それから、今のは公開の話ですが、それとは別に、分析をされる場合は、どの個人がどういう発言をしたかということは押さえて行うということですよ？

(木村) そういうことです。データとしては全部保有していますので。最終的には、社会調査ともマッチングできるようにしようということで設計はしています。

(土田) 微妙な領域に入るのですけれども、全ての発言と社会調査とをマッチングできるような形で整備してあります。ただ、できるということと、していいということは別ですから、どこまで踏み込むかは慎重に考えたいと思っています。

一番の問題は、20 人しかデータがないということです。簡単に個人が特定できてしまう。これが千人、二千人であれば、同じことをしてもあまり害はないのですけれども、かなり慎重に分析しなければならないと思っています。

(木村) 基本的には、フォーラムはフォーラム、社会調査は社会調査で独立に分析をしていくことになります。でも、やはりマッチングがあったほうがより重要な成果が見えてくる、あるいは、倫理的に十分配慮できる方法がある、ということであれば、そういうこともやろうと思っています。

(土田) 基本的には、社会調査のほうは、統計的に処理した、というところから踏み出さない形にしようと思っています。

(木村) 他はいかがでしょうか？

では、次に、シンポジウムの資料を使ってご説明をしていきたいと思います。資料 1-4 をご覧ください。こちらを開けていただくと、4 種類のパワーポイント資料が入っています。一番上の資料は、私が話した内容になります。次の「社会調査の実施とフォーラム参加者の決定」は、土田先生から講演いただいた内容です。次の「フォーラム実施状況の紹介」は、竹中さんから話していただいた内容です。最後に、このフォーラムでサブファシリテーターを務めていただいた元気ネットさんから、ファシリテーションについて話していただいたということになります。

(スライド 2) まずは、私の資料から説明していきます。この資料は、この研究の目的をなるべく分かりやすく伝えることを意図して作っています。

中心的な話題は何か。我々は「原子カムラ」そのものを扱うのではなくて、「原子カムラの境界」を扱うのですということ、まずお話ししています。「ムラ」を形作るのは、ムラ内部の凝集力ばかりではないのではないか。すなわち、「ムラ内部」と「世間」との相互作用によって、その 2 者間に境界が生じたような状態と考えられるのではないか。今回は、その境界をどうやったら越えられるだろうかということに注目した研究です、ということを確認しました。

この点を確認しておかないと、どうしても原子カムラそのものの話題が出てきて、議論がごちゃごちゃになってしまうので、まず、このことを話しました。

(スライド 4) スライド 4 では、ムラの中とムラの外という二項対立的にモデル化してしまっていますが、これは分かりやすく説明するためのイメージ図です。

ムラの中の人、「きちんと説明しなければ」と思うものの、「こんなことまで説明したら、ますます人びとから信頼を失いそうだ」「どうせ人びとは理解できないし」と思って、伝えることにブレーキをかけてしまう。

それでも伝えていくと、今度はムラの外の人、「また、何かが起こったのかしら？」から始まって、「どうせ難しいことしか言わないし」「肝心なことは隠しているに違いない」「どうせ私たちを見下しているんだろう」「やはり信頼できない」と思い、出てきた情報を受け入れていかない。

それを見て、ムラの中の人、「やはり、全然分かってもらえなかった」「どうせ分かってもらえないのに、全てを話す必要があるのだろうか」と思ってしまう。

このような、コミュニケーションの不全と不信の悪循環があるのではないか。

さらに、この図の中で色が塗ってある吹き出しは、相手を勝手にイメージして、思い込んでしまっているところです。相手への思い込みによって、コミュニケーションの不全と不信の悪循環が回っている状況だとすると、これをどうにかしなければいけない。ということの説明をしました。

(スライド5) スライド5は、それを文章化しています。

お互いが何らかの思い込みをして、お互いのギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないか。

「原子カムラ」という言葉は、相手への思い込みを顕著に表している言葉かもしれない。お互いの思い込みによるギャップを「原子カムラ」の境界と表現することとした。この研究では、この思い込みをどう乗り越えていくかを示すことが、一番の目的である。研究の目的、そしてフォーラムを実施した目的を、ここで明記したということです。

(スライド6) では、どうすればいいかということ、このスライドに書いています。

お互いの思い込みが強まっていく構造を止めることがまず第一歩だろうと。思い込みが強まる構造として、例えば確証バイアスみたいなことがありうるのではないか。ある行動について仮説を立て、その仮説を証明する事柄を探し、仮説を確信していく。先ほどのムラの中、ムラの外のモデルで言うと、ムラの中の人、「どうせ理解できない」「やはり分かってもらえない」と思い込んで、それを確証していってしまうということが起こりうる、ということです。そこで、お互いのイメージが必ずしも全員に当てはまるわけではない、ということを知ることが、この構造を止めることにつながるかもしれない。これがフォーラムのひとつのコンセプトになります。

(スライド9) 市民と専門家が、お互いに尊重することを可能とする仕組みを創り出すということ。その場として「フォーラム」を設計する。お互いに思い込みによるイメージが必ずしも正しくないことを知り、様々な個人の存在を認めるという状態を目指すことを、フォーラムの目的としました。

その要件としては、市民と専門家が対等な立場でのコミュニケーションを通じて、お互いのコンテクストを知り、人となりを理解すること。伝聞ではなくて、直接のコミュニケーションという手段をとること。

これが、私が一番伝えたいことになります。

(スライド11) そして、その目的を達成するための工夫をいくつか挙げています。

まず、参加者が公平だと思える場作りをすること。そして、冷静な話し合いを導いて、その場を客観的に捉えること。

「公平だと思える場作り」のために、社会調査を実施し、それに基づいて参加者の選択をしたということです。この部分に関して、土田先生に話してもらったということになります。

また、グループワークを中心とした、対等に話せる雰囲気作り、記録はそのまま公開すること、コミュニケーション・マニュアルの整備、サブファシリテーターの設置、参加者にファシリテーターをなるべく経験してもらうこと、などについては、竹中さんの発表の

中で、かなり時間をさいて、丁寧に話していただいたということになります。

私は、原子カムの境界が目的であって、原子カムそのものが目的ではないということ、まずきちんと伝えるということ。フォーラムは、様々な人たちがいるということを知って、それを尊重して迎えることを目的としているということを伝えるために、シンポジウムの冒頭の15分を使ったということになります。

ここまでの内容について、質問を受けようと思えますけれども、いかがでしょうか？

(安部) この問題提起について、シンポジウムの参加者から何か意見は出ましたか？

(木村) 「そうはいつでも、原子カムそのものの体質が改善されないといけないのでは？」という質問は一部ありました。ただ、この研究はそこではなくて、境界の部分について議論が進んでいるということは理解したと。

シンポジウムでは、東京大学の公共政策大学院の谷口先生をコメンテーターとしてお招きしました。谷口先生は、東海村でシーキューブというNPOを立ち上げて、リスクコミュニケーションにずっと取り組まれているのですが、「こういう取り組みは、リスクコミュニケーションのやり方としては正統的なものである」というコメントをいただいています。

(安部) もうひとつ、「思い込みをどう乗り越えていくかを示すことが一番の目的です」とありますが、乗り越えた先で何を獲得するのか、という質問は出ませんでしたか？

(木村) そういう質問はありました。ただ、答える時間がなくて、その場では答えていないですね。

今、私は、別の枠組みでリスクガバナンスの研究を始めようとしています。いかにリスクに対応していくか、様々なステークホルダーと一緒に協働するために、コミュニケーションを使って、リスクを管理していく。それがリスクガバナンスという概念です。そういうものに進んでいけたら、と考えています。

ただ、現在原子力業界に対して強い不信があって、そもそもまともな議論もできない状況なので、まずはまともな議論ができる状況にするための仕組みとして、この研究を進めているということです

これができたら、次に、例えば福島では放射線のリスクは厳然としてあるので、それにどうやって対応していくかということと一緒に議論していかなければいけない。そのための土台がこの研究によってできたら、では、一緒にリスク管理をする枠組みを作りましょうということで、次のステップのプロジェクトでは、それを計画しているところです。

このプロジェクトの中ではそこまではできないのですけれども、私の研究の目標としては、そういう方向に進んでいこうと考えています。

(安部) 今のお話に関連して、私が最近関わった事例をご紹介します。

JR 東海のある駅で、認知症の高齢者の方が、切符も何も持たずに駅構内に入って、駅員の目をすり抜けて電車に乗って、次の駅まで行きました。そして、どうやらおしっこがしたくなったらしいのです。それでホームから線路に下りていったところ、電車に轢かれてしまいました。JR 東海は、認知症の人を監視しなかった責任を問うて、長男夫婦に対して700万円ばかりの損害賠償を要求しました。裁判所もそれを支持して、損害賠償を命じたのですが、認知症に対する無理解だという声もあがり、その後も議論が続いています。

今後、認知症の方は増えていくと思われます。家族も完全なコントロールはできないから、電車にはねられたり、車に轢かれる事例も増えてくると予想できます。

この例のように、事業者だけのリスクガバナンスでは限界があるから、家族や社会が見守りをして、双方でリスクを減らす努力をする必要があるでしょう。これまでの日本では、事業者がリスクガバナンスをしろという議論だったのですが、それには限界があって、もう先に進まないような状況になっているのです。私も、運輸の安全を考えたときに、単なる事業者責任だけのリスクガバナンスでは駄目だということを常々思っています。今までの木村先生のお話を聞いていると、そういうことに通じるような問題意識を持っておられるのかなと感じました。

(木村) そうです。例えば、同じ放射線の量でも、リスクを受け入れてもいいと思う人と、絶対にいやだと思う人がいます。それに対して、丸めて対応することは不可能なので、きめ細やかな対応ができるような体制にしなければいけない。それにはガバナンスを考えなければいけないのかなと思っています。

(安部) そこまでこの研究でやるとすると、それはつまり他分野応用可能型で、日本のリスク研究の新しい分野になっていくと思うので、非常に将来有望な研究の素材になりますね。

(木村) ありがとうございます。

あと、そういう意味では、今回の枠組みは、誰か講演者がいたり、プロフェッショナルが全てをまとめるのではなくて、周りからサポートする仕組みさえ作っておけば、その中でうまく回っていくという、「人に頼らない仕組み」がもしかしたら提案できるのではないか、という意見もあります。リスクコミュニケーションをするときは、どうしても「エース」が要るのですよ。その地域にエースがいて、その人が頑張るからその地域は回る、みたいな側面がどうしてもぬぐえなくて、それがあると横展開がとても難しい。それをどうにかできる枠組みを作っていきたいという思いもあります。

(安部) 先駆的な NPO 活動であればあるほど、リーダー的なフロンティアとその他の人

の距離が離れていて、フロンティアの人がこけてしまったらもう動かなくなってしまふ、というのはよくあることなのですよ。その辺りをどう埋めるかは、確かに大きな課題ですね。

(木村) 原子力分野は、「原子力のことはなんでも知っています」という人はもういないし、今後もおそらく出てこないと思うのです。あまりにも幅が広いので。

そうすると、専門家がパッチワークのように専門知識を作っていくという構造になっていくので、そういう中でのコミュニケーションスタイルを考えていくと、旧来的な、エースが頑張ってコミュニケーションしていくというスタイルはそぐわなくなっていく。一方、今回の枠組みは、そういうときにも使えるのでは、という指摘が業務推進全体会合の中であって、私もなるほどと思って、今、頭の中で寝かせているところです。

(定松) 今回の調査は首都圏住民が対象で、専門家も、例えば低線量被ばくの専門家に絞ったりはせず、比較的緩やかに広くとっていますよね。そこには、やむを得ないことではあると思うのですが、ギャップがある。そういう意味では、マスコミ対応とか、もっと一般的なところに抜けていくのかなと見ていたのですけれども、それはむしろ地域的なところに抜けていくつもりなのでしょうか。地域的な問題に抜けていくとすると、今の取り組みと少しギャップがあるところをどのように思っておられるのか。その辺りについて、お考えを聞かせていただけますか。

(木村) 地域的な取り組みに入っていくほうが、空中戦にならずに済むというか、しっかりと議論がかみ合うのではないかと考えています。

実は昨日、環境関係の勉強会に出て、いろいろな意見を聞いてきました。自分たちでリスクを管理しろと言われるのは嫌で、それこそ、誰かが言ってくれればそれでOK、そのほうが望ましい、という人たちもたくさんいらっしゃいます。かといって、そういう人だけではありません。あの人の言うことは信用できない、自分たちでやらなければ、という人たちもいるので、そういう人たちのためのコミュニケーションもしなければなりません。それひとつで完璧なコミュニケーションができる、というよりは、いくつかのコミュニケーション手段を組み合わせ、どうにか全体をまとめていかなければならないようなときに、そういうリスクマネジメントを踏まえたようなコミュニケーションの枠組みは、今のところできていないので、それに取り組むというのはひとつの展望としてありうるかなと思っています。

今回のフォーラムでは、市民もあまりリスクを自分ごととして思っていない人たちだし、専門家も分野を特定していないので、ふわっとした集まりでした。これが、自分たちはリスクを持っていて、関心も高い、という人たちが対象になると、専門家集団も明確化してくると思います。ただ、そういう場合でも、いきなり意見をぶつけ合うのではなく、曖昧

性を許容すると言ったらいいのでしょうか、そういうコミュニケーションを取れるような導入部分の設計に、今回の枠組みを応用できるのではないかと考えています。

(定松) そういう意味では、いきなりハードなケースをやるよりは、ソフトなケースをやるという意味はありそうですね。

今回フォーラムに参加された一般の方々は、例えば放射線のリスクに対する感受性に違いはありましたか？ それとも、首都圏住民だとやはりあまり差はありませんでしたか？

(木村) 土田先生にお答えいただいたほうがいいと思いますが、どうですか？

(土田) 人それぞれではあります。ただ、「よく分からない」という基本的な大前提があります。ですから、それこそ「エース」が出てきたら、皆、はいそうですか、となるのですが、エースがいないと、それぞれが勝手にバラバラに考えているのだと思います。それを測定すると、いろいろな人がいます、という結果になるのですけれども。

エースが何か一言言えば、一斉にひとつのところにびく。おそらく、そういう状態にあるのだろうと思います。

(新澤) フォーラム参加者がどのように感じたか、ということに非常に興味があるのですが、この後、それについての説明はあるのですか？ 話し合いの結果、どのようなプログ्रेसがあったのか。今までは枠組みの話でしたが、その次の、中身の話が非常に気になります。

(木村) では、私の発表に対する質疑はひとまずここまでにして、次に進みます。

シンポジウムでは、私の発表の後、土田先生から、社会調査について発表していただきました。ここで定量的な条件を押さえた上で、次に、竹中さんから、フォーラムの実施状況について発表してもらいました。この 2 つの発表の中で、実際にフォーラムに参加した人が感じたことなどが出てきますので、まずはそちらをお聞きいただきたいと思います。

(土田) (スライド 2) では、私が発表した内容について、簡単にご説明いたします。

先ほどからありますように、首都圏住民と日本原子力学会員を対象とする社会調査を実施しています。原子力学会員対象は 2007 年から、首都圏住民対象は 2008 年から、毎年 1 回ずつ行われてきています。

基本的に首都圏住民にも原子力学会員にも同じ調査票を使い、半数以上の質問項目は経年変化を見ることができるよう継続し、残りはその年ごとに変えているということになります。

(スライド 3) 調査方法です。首都圏調査は、調査会社の人々が個別訪問して、質問票を置いていって、あとで回収に伺います、という形です。お願いできますかと調査員が聞いて、はいと答えた方に答えてもらうので、回収数はきっちり 500 名です。

学会員のほうは、原子力学会の名簿から 1400 名をランダムサンプリングして、調査票を郵送しています。今年は 559 名から返信がありました。これは一番低い回収率です。多ければ回収率 44%、600 名台にいくのですけれども、今年は低かったです。

(スライド 5) 続いて、毎年の調査の結果について申し上げます。結論は、ほとんどの認識には正反対ともいえるほどに住民と専門家には大きな認識ギャップがある、ということです。

(スライド 6) 例えば、「今後、原子力発電の安全を確保することは可能か？」という質問では、首都圏住民で安全が確保できると思っている人は、20%強です。ところが、学会員は、ほとんどの人が安全を確保できると信じています。

(スライド 7) 「原子力発電を利用すべきか、廃止すべきか」。この質問では、福島の影響が表れています。2011 年度の調査で、首都圏住民の「廃止すべき」という意見が、一気に 50%近くまで増えています。一方、原子力学会員は、少し「利用すべき」が減るのですけれども、それほど大きな変化は出ていません。

さらに、首都圏住民の意見は、2011 年度と 2012 年度でほとんど違いがありません。ところが、学会員のほうは、1 年経っただけで、やはり続けていくべきだという方向に意見が戻っています。やはり基本的に考え方に違いがあるということです。

(スライド 8) 「安心か、不安か」という質問も、同じ傾向がみられます。

(スライド 9) 「原子力発電がなくても、日本の経済は発展できると思いますか？」という質問に対して、学会員の大部分は、原子力なしに日本の経済の発展は考えられないと言いつけています。首都圏住民とは意見の分布がまったく違います。

ですから、「原子カムラ」とあえてレッテルを貼らなくても、原子力の専門家と一般市民は意見がそもそも合わない、ということが社会調査から見て取れます。

(スライド 10) とはいえ、例外はあります。高レベル放射性廃棄物についてです。

(スライド 11) 「高レベル放射性廃棄物の最終処分場を早急に決定しなければならない」という質問に対しては、福島事故以降、首都圏住民の意見が学会員の意見に近づいてきています。むしろ、学会員のほうが、福島事故を受けて、無理なのではないかと悲観的にな

っています。

(スライド 12) 「最終処分場は当分の間決定できない」という問いかけに対しては、首都圏住民は、決定できないことはない、という意見を 2011 年度から 2012 年にかけて増やしています。

つまり、福島の事故を受けて、自分たちの問題ではないと思っていたものが自分たちの問題になって、廃棄物を怖いと言っているだけでは収まらないという認識が市民の中に生まれてきた表れだろうと思います。

個人的には、今、高レベル放射性廃棄物の処分を推進しないで、いつ推進するのか、と思います。

(松田) そうですね。

(土田) (スライド 13) それから、専門家が自ら「ムラびと」になろうとしている面もあります。原子力に関わっている人や組織に対する印象を聞く質問で、そのような傾向が見えてきました。

(スライド 14) 「原子力に関わっている人たちの価値観や考え方は、一般の人たちとずれていると思う」という問いかけに対して、確かにずれていると思っている首都圏住民は 40% 近くいます。一方、学会員は、7 割以上の人たちが、自分たちはずれていると思われていると思込んでいます。

(スライド 15) それから、「原子力に関わっている人たちに感謝しているか」という質問をすれば、5 割以上の首都圏の人たちが感謝していると答えてくれます。ところが、原子力学会員で、一般の人たちに感謝されていると思っている人は、ほんの数%です。むしろ、6 割以上の人たちは、自分たちは感謝されていないと思込んでいます。

同じ意見を持ってください、という試みをしているつもりは私にはないのですね。そうではなくて、お互いに分かり合いましょうと。意見の違いは二の次であって、お互いに信頼できる、相手が嘘を言っていると思えない、という状態を作ることが目的なのです。その目的からすると、むしろ専門家のほうが、自分たちは嫌われているし、何を言っても信頼されるはずがない、と思込んでいる。まずはここから直していかないといけない。

(新澤) 六ヶ所に、核燃料の処理施設がありますよね。この前、東大の生産技術研究所のシンポジウムで聞いたのですが、使用済み燃料の処理は、ほとんど片がつくのだそうです。でも、まだもたもたしている。

一方、高レベル放射性廃棄物は、いろいろなものが出てくるのでしょうか？ ひとつの原

発から、年間どのくらいの量の高レベル放射性廃棄物が出てくるのか。市民は、そういう基本的なことが全然分かっていない。比較的関心を持っている私ですら分かっていないから、まして、普通の市民はまったく分からないのだと思います。

(土田) おっしゃるとおりです。一般の人たちは、言葉のイメージで考えているのだと思います。「高レベル」の下に「放射性」がついて、さらに「廃棄物」であると。嫌われる言葉が3つも並んでいるものを、安心しろと言われても、安心するはずがないですよ。

(定松) 高レベル放射性廃棄物の設問がありましたが、高レベル放射性廃棄物の説明は書かれているのですか？

(木村) 書かれていません。

(定松) そうすると、特に事故以降だと、福島周辺で出ているものと勘違いしている可能性もありますよね。

(土田) あります。確かに、福島のことだから進めなければいけない、と思った方もいるかもしれません。

(新澤) そういったことについて、もう少し分かりやすく、心配ありませんよということの説明すると、かなり違ってくると思いますけどね。

(土田) これは個人的な感想ですけども、高レベル放射性廃棄物は NUMO がやることになっていて、もう 10 年以上やってきたわけですよ。5 年くらい前に、東洋町のことがあって、高知新聞の人から紹介されて、高知県庁に話を聞きにいったことがあります。県庁内で一番詳しいと紹介された人が、「あれは地下で爆発するでしょう」と言っていました。びっくりしましたね。

(木村) それは、かなり詳しく知っている人だったか、そうではなかったか、のどちらかだと思います。

物理的な話になって恐縮ですが、簡単に言うと、使用済み核燃料からウランとプルトニウムを取り除いたものが高レベル放射性廃棄物です。プルトニウムは核爆弾の材料にもなるくらい、連鎖反応しやすい物質です。これは取り除かれます。しかし、高レベル放射性廃棄物の中にも、アメリカウムやネプツニウムなど、連鎖反応する物質がまだ何種類か残っているのです。地下に埋めたときに、それらが地下水に乗って流れていくと、連鎖反応する物質だけが凝縮する作用が存在する可能性もある、という報告はあります。爆発では

ないけれども、臨界して発熱することはありうる、ということは実は言われています。

(土田) でも、臨界と爆発は全然違うでしょう。

(松田) そういう可能性があっても、安全性は技術でプロテクトしているわけでしょう。

(新澤) 私は工学部出身で、それなりにこの分野についてベースの知識はあるのですよ。そういう人を増やしていくと、また変わってくると思います。

でも、私は妻には説明できないですね。妻は怖がっているのですね。なかなか説明できない。そういうところに大きなギャップがある。そのギャップを埋める努力を、原子力ムラの人がもっとやってくれればいいのに、と思いますね。

(土田) フォーラムの中では「専門家」と呼んでいますけれども、実際は原子力学会の会員でしかないわけですね。そうすると、「そういうことは分からない」という正直な発言が、フォーラムの中で出てくるのです。それを聞いて、市民の人も驚く。そこから理解が深まっていく、という場面がありましたね。

(木村) 専門家といえども、原子力全てを分かっているわけではないということですね。

(安部) 狭い領域の知識は高度だけれども、全体を見るのは非常に弱いですよ。これは原子力に限った話ではありませんが。

(木村) 先ほど、昨日は勉強会があったと言いましたが、元国立環境研究所、今は東大の都市工で教授をされている森口先生も出席されていました。森口先生は学術会議関係にもタッチしていて、その中で、福島除染をどうにかしなさいと国から話が来ているけど、学術会議はまったく動く気がないということで、とても怒っていらっしゃる。

だったら、私たちがやろうと。それで、とりあえず科学者の中での「知識の棚卸し」をしよう、とおっしゃっています。放射性物質について、今、科学者はどこまで分かっている、どこまで分かっていないのか。まずはその棚卸しをしよう。それができないことには次の議論にならない。そのくらい、今、専門家同士で情報交換のやり取りがないのです。しかも、分野によっては、自分が研究しているデータは論文になるまで出さない研究者もいます。そして、論文になったらそれで終わりなので、展開もない。そういう研究者が多いのです。

それをどうにか打ち崩し、まず、科学知識のプラットフォームを作ろう、というお話でした。その上で、私は、社会的なプラットフォームについても、その後のフェイズで同じようにしたほうがいいのではないかと考えているのですけれども。

(新澤) そうですね。原子力学会には専門家が大量にいると思うけど、コミュニケーションやコラボレーションがあまりなくて、それぞれのところに知識がたまっているのだと思います。

まあ、学会というものは、私も情報処理学会に入っていたけれども、論文を書いて発表するくらいで、積極的に社会的な問題解決を図ろうというモチベーションはないのだけでも。それは分かっているのですが。

(土田) 心理学会でも、全ての部門を統合してひとつの知を作ろう、という活動はありません。

(新澤) 本当は、そういう動きを起こしたほうがいいですよ。大学の先生は大学の先生で、縦割りになっているし。原子力学会で、そういうプロジェクトなり、チームなりをおこして、取り組むべきだと思います。そうすれば、市民の信頼も高まりますよ。

(土田) 雑談になりますが、私が原子力学会に入るか入るまいか悩んでいた頃、東芝の工場長から京大の教授になられた宮沢さんに、「原子力学会で発表することを全部理解できる人は、日本に 1 人いるかいらないか。まあ、いないだろう。それぞれ自分のやっていることは分かるけど、他の部屋でやっていることは分からない」と言われたときが、一番衝撃でした。

(松田) お医者さんもそうですよね。

(新澤) 除染の問題にしても、「原子力学会の〇〇チームからこういう提言があった」となれば、とても信頼が高まるのだけど、そういう動きは見えないですよ。大学の先生方が個々に言っているだけであって。

(木村) 今、お話ししていて思ったのですが、全てを分かっている専門家はなくて、いろいろな専門家がいる、ということが分かったとしても、では、どうやってそれらの知識を統合するのか、どういう仕組みがあるのか、ということに答えられないと、信頼を得ることはできませんね。

(新澤) そう思います。ぜひやってほしいですね。

(土田) 一般の人たちのメンタルモデルから言うと、2つの方向があると思います。専門家の人たちはああなんだから、自分たちが勝手に考えていいんだ。自分たちのこと

をそんなに卑下しなくていいんだ。これが一方のベクトルです。

もう一方は、専門家ですらコントロールできていないんだから、全部禁止しなければ、という方向です。

そのどちらのベクトルに行くかということが、フォーラムとしては、非常に力の入れどころになるのかなという気がします。

(松田) 市民と専門家のギャップが、データとして出てきたのはいいですね。これが基本になりますね。

(土田) (スライド 16) では、説明を再開します。フォーラム参加者の選定です。

首都圏住民については、社会調査に協力いただいた 500 名の方に、フォーラムにも参加していただけないかという呼びかけをしました。お答えくださったのは 8 名 (女性 2 名、男性 6 名) です。

シンポジウムでは、谷口先生も「私も東海村で始めたときは同じような状況だった。初めはそんなものでしょう」とコメントくださいました。しかも、まだこの段階ではあやしい呼びかけだったものですから。

(松田) 相手の顔が見えない状態ですからね。

(土田) 続いて、選定の基準について申し上げます。

社会調査から、首都圏住民で原子力発電に反対する人が約 50%いるということが分かりましたので、反対か賛成かで分けたい。年齢は、40 歳以上、40 歳未満で分けたい。男女も半々にしたい。これで、2 かける 2 かける 2 で 8 ですから、これで 10 人を集めようと考えました。

これらのセルに入る人を集められないかということで、新たに声かけをして、我々の知らない人という前提の下で、最終的には女性 5 名、男性 7 名のプールを作ることができ、そこから男性 5 名、女性 5 名を選ばせていただきました。そして、結果的に、意見分布も母集団と同じになりました。詳しくは後で申し上げます。

原子力学会員の場合は、女性 2 名、男性 23 名の応募がありました。原子力学会は、元々女性会員が少ないので、これは仕方がない。でも、なるべく女性を多く入れたいという考えはありました。賛否に関しては、先ほどのデータでお見せしました通り、原子力に反対する人はまずいないということで、選定の基準にならない。基準としては、なるべく女性を多くするという事。年齢は、首都圏住民と同じく 2 分割。あとは、原子力学会の中で専門分野が 6 つ設定されていますので、その偏りが出ないようにという形で、10 名を選びました。

(スライド 17) 結果的にどうなったかという、フォーラム参加者の意見分布は、母集団の分布とほぼ同じでした。

首都圏住民の参加者の場合は、母集団よりも関心が少し高め。それから、「どちらともいえない」と答える方が少ない、という傾向がありました。

(スライド 18) これは首都圏住民全体と、首都圏住民のフォーラム参加者の意見を比較したグラフです。赤がフォーラム参加者、青が母集団です。「原子力発電に関心がありますか？」という質問で、フォーラム参加者は、若干関心が高いほうに偏っています。

「利用していくべきだと考えますか、やめるべきだと考えますか」では、一般サンプルだと「どちらかといえばやめるべき」という意見が多いのですが、フォーラム参加者の場合は、はっきりと「やめるべき」という声が多い、という傾向があります。ですが、その他はほぼ一致しています。

ですから、普通の市民の分布をそのまま 10 名に縮小した形のフォーラムが形成されたと考えています。

(新澤) この調査は、フォーラムをする前にしたのですか？ それとも、フォーラムの後ですか？

(木村) 第 1 回が開かれる前に調査票を郵送して、それを第 1 回のときに持ってきてもらったという形です。ですから、フォーラムの直前ですね。

(新澤) 問題意識の強い人がフォーラムに参加したということですね。いや、私は、フォーラムに参加して、不安が増幅したのかなと思ってしまいました。

(土田) いえ、違います。元々の下地があったということです。

それから、ここには載せていませんが、フォーラム終了後に毎回アンケートを取っています。さらに、全フォーラムが終わった後にも調査しています。ですから、事前と、5 回と、終了後、計 7 回同じような質問をしているのですが、結論を言うと、意見は変わりません。先ほども言いましたように、考えを変えるのがフォーラムの目的ではないので。ただ、人によっては、自分の気持ちが裏付けられて、より強固に反対するようになった人もいるだろうな、ということが見えるようなデータでした。

(定松) 変化がないというのは、この項目に関しては、ということですか？ 他もあまりなかったのですか？

(土田) 他もあまりないです。

(新澤) ということは、極端なことを言うと、コミュニケーションなりコラボレーションの場を作っても、

(安部) 効果がないと。

(新澤) そうなりかねないですよ。

(土田) いや、心理学の本音で言いますけれども、このくらいのことで意見が変わるくらいだったら、トヨタや電通は苦勞していません。

(新澤) でも、変わってほしかったですね。

(定松) ただ、これは発電に関する意見で、例えば、原子力ムラに対する信頼、あるいは研究者に対するイメージ、という質問ではないわけですよ。

(土田) そうですね。むしろ、理解が深まった、信頼できるものだと思った、というような質問項目が変わってくれることを望んでいます。

(定松) そういう質問は、調査票に入っているのですか？

(土田) 今年度は少ししかなかったのですが、来年度は、そういうことも踏まえて設計していきたいと思っています。

(木村) そういうことを聞いておかなければいけないということが、1回フォーラムを回したことで明らかになってきたので、再設計にうまく活かせるかなとは思っています。

(松田) アンケートの 500 人は、今年はまだランダム抽出で、同じ人ではないわけですね？

(土田) はい。ランダム抽出です。かなり低い確率で同じ人になる可能性はありますけれども。

(木村) 意見の変化という意味では、竹中さんの資料にも載っていますので、少しご紹介しようと思います。

シンポジウム当日は、首都圏住民のフォーラム参加者 2 名、学会員のフォーラム参加者 1

名に来ていただいて、お話しいただきました。それ以外にも、もうインタビューを終えていたので、そこから見えてきた変化をまとめて、竹中さんに話してもらいました。

スライド 28 をご覧ください。フォーラム参加前には、市民は専門家に「難しいことを言うんだろうな」「お高くとまっているんだろうな」というイメージを持っていた。これはいろいろな人が言っています。逆に、専門家は市民に「感情的に批判してくるんだろうな」「聞く耳を持たないんだろうな」というイメージを持っていた。まさに、お互いの思い込みによるイメージで、牽制しあうような状況だったと。

フォーラム参加後は、市民は「専門家もただの人なんだ」「専門家の中にもいろんな考え方があんだな」ということに気づいた。専門家は「市民から必ずしも責められるというわけではないんだ」「市民にはちゃんと話をすれば通じるんだ」ということに気づいた。こういう声が多く出てきました。

さらに、お互いの思い込みによるイメージで距離を取っている状態を、我々の研究では境界があると定義していたわけですが、境界は乗り越えられると思いますか、とお聞きしたところ、多くの方が、「乗り越えられると思う」と言ってくださいました。これが一番大きい成果かなと思っています。

(土田) 文学的な表現をすると、「俺はお前の言うことを絶対賛成しない。でも、お前がやることは信じられるから、勝手にやればいいよ」。おそらく、これ以上の落としどころはないと思うのですね。

(松田) そうだと思います。映画の最後のシーンですよ。

(木村) 意見が変わるということは期待していないし、むしろ、変わるということが成果になると、ある意味では洗脳みたいなイメージがあるので、そういうことではないと。ただ、やはり集まった人たちの中で人間関係や、その背後にある組織、グループみたいなものに対しての見方が、少し変わってくるのですね。そういうことのほうが大切かなと思っています。そういうところが変わったという声が挙がっているので、その点はよかったです。

さらに、フォーラムが終わってから、フォーラム参加者が自主的に同窓会みたいなものを企画してくださっているようです。まずは女子会からということらしいのですが。そういう形で、フォーラムが個々人の次の活動につながってくるといいなと。それがうまく観測できれば、それも大きな成果なので。

(定松) つまり、フォーラム外のコミュニケーションが結構あって、それがポジティブに作用している面があるということですよ。研究的、方法論的に厳密さを追求すると、それもカットしないといけないのだけど、でも、それは避けられないし、例えば実際に地

域でやっていくときも、話し合いの場だけでなく、プラスアルファのところでのコミュニケーションは大事になってくると思います。

ですから、行き帰りの電車で話したことや、懇親会で話したことに関しても、どういう効果があったか、インタビューなどで聞いてみるといいのではないのでしょうか。

つまり、そこを触れないようにしてしまって、「フォーラムの成果です」と言ってしまうと、不正確ですし、むしろ、フォーラム外のこと（インフォーマルな場でのコミュニケーション）もとても大事なことだと思いますので。

（木村） 第1回は終了後に懇親会をしました。

第2回からは懇親会はなかったのですが、参加者同士で自由に話したいという意見も出ていたので、飲み会にはしないけれども、そして運営側も積極的にはタッチしないけれども、参加者同士が自由に話せるスペースを設置することにしました。フォーラムが終わった後、30分程度、テーブルとイスを残しておくので、自由にご利用くださいと。それがかなり好評で、「そこで自分の思っていることをうまく言えた」というような意見がインタビューでも出てきています。ただ、フォーラムの枠外なので、観測はできないのですけれども。学問的には大変なのですけれども、そういう場の効果は重要だということで、そういう場も作りました。

（定松） そういった試みについても、正直に書いたほうがいいのではないかなと思います。つまり、この研究を参考にして誰かがどこかで似たようなことをするときには、プラスアルファ（フォーラム外でのコミュニケーション）が大事ですよ、ということ自体も重要な情報だと思うので。

（安部） 専門家と市民が一同に会して、原子力について語る場としては、政府や、かつての保安院主催の公聴会がありました。市民側は原子力反対ないし慎重派の立場で議論します。そして、保安院側の説明要員として、旧原研のメンバーなどが専門委員として動員され、市民の辛辣な意見を聞くこととなります。この形式は、是か非かという結論を設定して意見を求めるから対立型になる。今回のフォーラムは、結論を求めていないですよ。

（木村） 求めませんでした。

（安部） ところが、結論を求めないほうが実は対話が進む可能性がある、ということを示唆しているのでしょうか。この効果はとても大きいと考えています。

（土田） すみません、話を戻す形になるのですけれども、社会調査に関して、私が一番言いたいことは、フォーラム参加者に偏りがなかったということです。調べた指標は限定

的ではあるのですけれども、一応、反対派の人だけを集めたわけでもないし、推進派の人だけを集めたわけでもない、といえます。

社会調査で取った首都圏住民の意見分布と、フォーラム参加者の意見分布は、ほぼ同じだった。原子力学会員の場合も、ランダムサンプリングで取った意見分布とフォーラム参加者の意見分布が一致していた。という形でしたので、公聴会のような、反対する人が、ここで意見を言わなければと思って熱を入れて来るようなフォーラムではなかったということは事実です。

(木村) ただ、ひとつの課題としては、フォーラム参加者が参加した時点では、そのことがうまく伝わらなかったということです。実際に、フォーラム参加者が数人シンポジウムに来てくださっていたのですけれども、「今日で謎がいろいろ解けた」とおっしゃっていましたので。

そういう意味では、公正に、公平にというところに気をつけて設計しているし、そういうデータも持っているのです、そのタイミングそのタイミングでうまく伝えていくことが本当は必要だったのかもしれませんが。

(松田) でも、そうすると窮屈になってしまうかもしれませんね。やはり、シンポジウムまで参加して卒業、みたいな形なのでしょうね。

(木村) ええ、実際にそうでした。シンポジウムが終わった後に、「ああ、そういうことだったんですか」といろいろな人に言われたので。

その辺りをどうしたらいいかは、検討課題かなと思っています。ただ、確かに、第1回フォーラムでいきなりこういうデータを渡されたら、びっくりしますよね。

(土田) 何のために来たのか混乱してしまうでしょうね。

(松田) そうですね。5回のフォーラムを終えた後だからよかったのだと思います。

私の感想としては、非常に計算された、綿密なプログラムを作られた中で、ランダムに原子力サイドの方と市民サイドの方が集まって、設計は非常にきめ細やかなのだけど、参加した方は自由に話し合っ、その様子を学者の方たちが公平に分析していく。そんなステージができているのだらうなと感じました。すばらしいことだと思います。

日本には今までこういう研究はなかったと思います。統計学的にやるという話はたくさんあるけれども、現場の方とのコミュニケーションの中でプログラムを設計して作っていくという研究は、条件が整わないとできない研究ですから、今まではなかったのですが、今回、こういう形で整ってくると、今度はいろいろと注文をつけたくなって、あれもしろ、これもしろ、と過剰になりがちなのですが、階段は一步步つしか上れないものです。これ

はベースを作る研究なので、温かく育てていくことが大切だと思います。その上で、安部先生のおっしゃっている、他の部門にも応用が効くという整理の仕方は、最終段階ではぜひやっていただきたいと思っています。まずは、入門編を作るところからでしょう。

(土田) ありがとうございます。

私は、学会員のほうに目が行くのですね。ランダムに選ばれると、学会員といえども、偉い人ばかりではない。市民とほとんど変わらないような学会員もいる。そうすると、市民も、「ああ、専門家も自分たちと同じだ」と感じることができる。

一方、原子力の専門家の中には、そういう人を市民の目に触れさせたくない、という意識もあったのではないかなと。立派で、肩書きがあって、まともなことを言う人だけが原子力の専門家である。そういう人を市民に提示しなければならない。でも、そんなこと言わないで、全部ありのままに見せれば、かえってそのほうがいい。

(松田) なるほど。その通りですね。

(新澤) これは研究活動なのですが、私はコンサルタントなので、つつい実利的なことが気になってしまいます。問題点、原因、解決策を考えていく。その面から言うと、この研究は、どのような成果が出てくるのかな、とってしまいます。

研究的な部分は、しっかりとまとまるのではないかと思います。ですが、せっかくおやりになるのですから、社会に対する貢献を考えて、研究と多少離れたものがあった方がいいのではないかなと。「専門家集団はどうすべきだ」というものは出てこないでしょうか。それが出てくると、私としては、この研究活動の成果がずっと入ってきます。

(木村) こういうコミュニケーション活動は、どうしても、横展開が弱いという指摘を受けます。「その場はいいかもしれないけど、では、それが世の中にどう影響するのですか？」という指摘は多いので、その点を常に念頭におかないといけないのですが、一方で、焦ってそこに結びつけるのも変なので。

(新澤) ええ。そうすると、研究ではなくなってしまうからね。

(木村) はい。なので、先ほども言いましたけれども、原子力のことは全部分かります、みたいな人がいなくても成立する、専門家と市民とのコミュニケーションシステムとして、ひとつの方法論が開発できれば、

(安部) 新しい社会技術のひとつですよ。

(木村) はい。それができれば、社会に大きな貢献ができると思っています。

一方で、全てを網羅している専門家は少ないからこそ、いろいろな知識のパッチワークがあって、どうやってその中で知を統合するか、という課題もあります。このプロジェクトの中ではそこまでは踏み込めませんが、違うプロジェクトを立ち上げて、それぞれ知識の統合と同じように、いろいろなプロジェクトを複合的に組み合わせていく必要があるだろうとは思っています。

(新澤) そのように展開していただけるといいですね。専門家集団と一般市民が話し合いができる場が、自然発生的に、社会構造上でできれば、素晴らしいと思います。

(土田) こういうコミュニケーションの方法があるということを提言すると、あとは社会のどの層においても、このやり方をすれば話し合いができる、という形になる。ある意味で、話し方の作法を確立するような研究になればいいなと思っています。

(新澤) そうですね。そう願います。

(松田) それをご覧になったコンサルタントの方たちがこの手法を学んで、国のいろいろな課題の解決に活用できるような、そういう研究をやっていただきたいですね。

(新澤) 専門家集団と一般市民との間で理解が進まない部分があるのは、別に原子力だけではないですから。国がひとつの単位としてまとまっていくために、ひとつの方法論が提案されればありがたい。ぜひ、そういう方向性も念頭に置いていただければと思います。

(木村) その「作法」が仕上がってきたら、次の段階として、実際に使ってみるとどうなのかという検証をする必要があります。このプロジェクトで、工学的な構成化ができたのであれば、今度は実装する部分の研究を考えたいとは思っています。

(定松) 関連して、例えば福島での展開を考えた場合のことをお聞きしたいのですが。今、福島に入られている専門家というのは、ある程度専門分野のばらつきみたいなものがあるのですか？ 例えば除染なら除染、低線量なら低線量という形で、分野が限られた形で入っているのではないかというイメージを持っているのですが、現状、あるいは今後の見込みはどうなっているのですか？

(木村) おそらく、まずは「知識の棚卸し」をしないといけないと思います。現在は、誰が、どこに、何を持っているかが分からないのです。かなりの混乱が生じています。そして、必ずしも、入っている人が全てを分かっているわけでもありません。

しっかりとしたコミュニケーションをしていこうと思ったら、専門家チーム作りから始めないといけないと思います。そのときに、専門家チームがどういうお作法を持たないといけないのかというところもちゃんと教育しておかないと、危ないことになると思います。

昨日の勉強会でも話題になりましたが、福島の人たちは、ある意味被害者意識が非常に強い。ですから、専門家チーム側も入念に準備する必要があると思います。

(土田) 情報の出し方も難しいと思います。心理系の学会でも話題になるのですけれども、今、汚染水の問題が報道されていますよね。福島の方は、かえって報道されることで神経を逆なでされる。もうこんなことを考えたくない。そういうことを忘れた生活をしたいのには、テレビで報道されるから、忘れることができない。それがストレスの原因だとおっしゃる。そんなに単純な話ではないです。難しい問題だと思います。

(定松) つまり、現状だと、フルの専門家チームが作れていないということですね。そうすると、現場に入ったときに、専門家として責任が過剰にかかってくることになります。つまり、このフォーラムみたいに「そこは分からない」とは言いにくい状況ですよ。

(木村) そうなります。

(松田) 福島の人に好感を持って迎え入れられる、人物的な要素も求められますよね。

(木村) はい。分かっていることを言わなければいけない状況というのは、お互いによくはないのです。専門家にとってもストレスフルだし、市民にとっても、もしかしたら正しくない情報が伝わってしまうかもしれない。

今のところ、これだ、というチームはありません。森口先生は第一人者で、いろいろなところに枝を持っている先生ですけれども、リスクマネジメントとして本格的に展開していこうと思ったら、森口先生 1 人ではとても回りません。そのときにはチームを作らなければならない。そして、おそらく森口先生はそこまで分かっているから、除染に関しての科学的なチーム編成をするために、まずは棚卸しをしようと言いだしているのだと私は思っているのですけど。

(松田) そうだと思います。とても大事なことだと思います。

(木村) ただ、チームを作ったとしても、そもそも不信感があるので、最初の段階でどのように信頼を作っていくか、という課題があります。今、現地に入っている人は、ずっと入っているから信頼ができていて、というところがあるので。そのために、ある種の作法みたいなものがこの研究で明らかになれば、それそのものは使えないと思うけれども、

応用可能な部分もあると思っています。

(安部) アメリカの大学院の修士課程では、リスクコミュニケーター要請のプログラムがあるのです。そういうところで「作法」は教えていないのでしょうか？

(木村) チェックリストはあるのですが、それは、個人がどう振舞うべきかというコミュニケーターとしての議論であって、フィールドの議論は少ないのです。フィールドとして、コミュニケーションを成り立たせる仕組みをどう作るか、という議論は、今まではあまりないですね。

(安部) そうですか。去年、スウェーデンの保健福祉庁の長官と話をしたときに、「スウェーデンの原発の立地の意思決定のときには、フォーラムを開いて話し合っている」という話をお聞きしましたが。

(土田) ヨーロッパには伝統があります。

(安部) そうでしょう。ですから、日本のオリジナルのものではないのですよね。

(木村) ヨーロッパの場合、いろいろ調べてみると、専門家の役割は、あくまでも市民に情報を提供していくことなのです。

(土田) フィンランドやスウェーデンは、県にあたる行政単位がないのですね。国のすぐ下が町なので、この手の話し合いを生産的に動かしやすい。

(松田) 人口が少ないのです。

(安部) そうですね。スウェーデンは 960 万人。フランスでも 6300 万人ですから。では、外国の事例はご覧になっているのですね。

(木村) はい。一通り調べています。その中で、この研究のオリジナリティが高いところは、「対等」の定義の仕方です。

(安部) 私は今まで事故調査に関わってきて、現在のリスクガバナンスの方法には大きな欠陥があって、何か方法をかえないと先に進まないと感じるところが多々あります。そういう意味では、今回の研究は応用できる部分が非常に多いと思います。

(木村) ありがとうございます。

すみません、時間がそろそろ迫ってきました。成果についてはほとんど説明できたと思いますので、最後にいくつかトピックをご紹介しますと思います。

竹中さんの資料の中には、苦労しましたということを書いている部分があります。例えば、スライド 17 で、「フォーラム自体が原子力肯定に偏っているように見える、という声が参加者から聞かれた」とあります。それに対して、フォーラムの進め方を調整していき、最後のほうには参加者の皆さんの中でフォーラムの進め方に対する理解が進んで、かつ、皆さんが進め方に慣れてきたので、最後の第 5 回は、もう私たちが何もしなくても、参加者だけでどんどん進めていけるような状況になっていました。それで、こういう声も最初はあったけれども、すぐに消えていったという事例を、このスライドでご紹介しています。

(土田) 少し補足します。先ほど、フォーラム参加者の意見分布が世間の分布とほぼ一致しているということをご紹介します。ところが、原子力に反対している方はその分布をミスリードしていて、市民には反対していない人はいない、かなりの思い込みがあるものですから、そういう方がフォーラムに来て、「強固に反対する人が私 1 人しかいない」と感じて、構成員が操作されているのではないかと、思われたのではないかと。

(木村) 市民の参加者の約半数は反対しているのですけど。

(土田) ええ。個人によって反対の表明の仕方が違うなと思いました。

(木村) それから、元気ネットさんの資料に関しても簡単にご説明します。

フォーラムの参加者は 20 名ですけれども、話し合いは 6、7 人のグループに分けて、グループワークという形で進めました。そこに元気ネットさんに「サブファシリテーター」として入っていただいたのですが、話し合いをリードするのではなくて、支援することに心を砕いていただきました。

普段元気ネットさんが実施しているワークショップでは、限られた時間内にいかに効率よく意見を出してもらおうかということで、かなり話し合いをリードして、意見を作っていくことに参加するのですけれども、今回はそれは一切やらないでください、ということで、そういう意味で苦労しました、ということが書かれています。

そういうことを説明するために、資料の前半に、元気ネットさんがどういう団体で、今までどういうことに取り組んできたのか、ということが書かれています。それを踏まえて、今回のフォーラムでどう思ったか、という話が書かれています。

今後の課題としては、公平性という部分に関して、参加者にファシリテーター役をしてもらったために、つまり、慣れていない人が進行役だったために、この論点を深めていけばもっと話が進むのに、というときに口を出せない。公平性と、話を深めるということの

トレードオフを、どういうバランスにするのがいいのかというところは検討課題なのではないか、という指摘をいただいています。

ということで、駆け足になりましたけれども、進捗状況の報告をさせていただきました。

それでは、最後に、皆様から一言ずついただいて、報告を終わりにしたいと思います。では、定松先生から一言ずつよろしいでしょうか。

(定松) 私はシンポジウムにも行ったのですが、先ほど言われたような、参加者の違和感みたいなものを率直に表明したことで、研究に対する信頼感が増したと思います。そして、それを受けてフォーラムの内容を調整された。最初の案（各回のフォーラムで話題の案）と、実際に各回のフォーラムで話し合っている課題（話題）が、明らかに違っていますよね。そういう意味では、この半年間で、プロジェクトとしてもテーマみたいなものが固まってきているな、と思いました。

最後に、ご提案なのですが、地域的な展開を考えるのであれば（首都圏でやるとしても）、話し合いのテーマがシャープであるほどいいのではないかと思います。

例えば、「低線量被ばくのリスクをどう考えるか」みたいなテーマでやってみるとか。原子カムラというテーマではなくなるのですが、専門家と一般の人の中にきっと大きなギャップがあって、それを、意見を変えるわけではないのだけれども、どういうギャップなのだろうかということ突き合せてみることは、福島につながっていくのではないかと思います。そういうテーマで次はやってみるといいのではないかと、思った次第です。以上です。

(新澤) 原子カムラの境界を越えるためにはどうすればよいか、というテーマ設定がされていて、原子力の専門家と一般市民の間で相互理解を深めていく。必ずしも同じ方向に行こうという結論を出さずに、理解を深めていく。

意見の違う人たちの中で「理解を深める」ことは、次にどうしたらいいのかということの出発点になるので、いろいろなところに応用できます。日本は、今、ともすればまとまりを欠いています。グローバル経済の中、国難といわれるような問題が山積しています。そういうところで応用できるような成果が出ると、私は出るのではないかと考えていますけれども、非常にいいですね。期待しています。

(松田) 私は、台風の直撃でシンポジウムに参加できなかったのですが、それだけにシンポジウムの記録が出るのを楽しみにしていました。全部読ませていただきました。というよりも、もう読んでいたらやめられなくなってしまったというくらい臨場感があって、かつ、まるで自分が参加しているような気がしました。このような記録のとり方も、今まではなかったまとめ方で、学問的に工夫がされていると思います。

その中で、当日コメントをいただいた谷口先生が、「仲間意識」という言葉を使ってい

っしかったです。「この研究では原子カムラという表現を使っているが、原子力の方々の仲間意識と、原子力ではない方々の仲間意識との間に差があって、その差をどうやって埋めるかを考える研究だと言い換えることができる」とおっしゃっていました。とても納得いたしました。

リスクマネジメントに取り組んでいる方々には、調査をするだけでなく、やはりこれからは調査を受ける方々とコミュニケーションを取っていただきたい。リスクコミュニケーターの方たちも、相手を調査対象としか見ていないような考え方はやめていただいて、やはり歩み寄りが必要ではないかと感じています。

ですから、いろいろな人たちがいろいろな立ち位置からものを言うことができるプログラムを設定したこの研究というのは、そういう意味ではとても価値があると。それが結論になります。

(安部) 当初の設定された目的に沿って、適切に運用されていると思えました。

前年度の 2 回目の外部評価委員会のときは、少し見えていない部分があったのですが、その後シンポジウムを実施されたことによって、全体のフォーラムがつながってきたかなと思っています。今までのお話を聞いていると、計画通りに進んでいて、次のステップに行けるようなところまで来ているかなと思えましたので、このまま継続していただければと思います。以上です。

(木村) ありがとうございます。

第 1 サイクルがほぼ終わったということで、今、その分析中ですけれども、そこで明らかになった課題や、それこそ社会技術化と言ったらいいのでしょうか、そういうことを明確にしながら研究を進めて、第 2 サイクルを進めていきたいと思っています。今後もよろしく願いいたします。

3. その他

(木村) 最後に、次回の外部評価の日程です。来年の 3 月 17 日に、今度は第 2 サイクルの前半が終わったところで、皆様にご紹介できると思えます。

では、第 1 回外部評価委員会をこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上